

平川公民館を眼下に望む打越・大竹の大古墳群

袖ヶ浦市教育委員会生涯学習課

○袖ヶ浦の古墳

「古墳」とは、3～7世紀頃（約1,750～1,400年前）に土を高く盛り上げて造られた有力者のお墓のことです。その形は、鍵穴のような形をした「前方後円墳」、円形の「円墳」、四角形の「方墳」など様々な種類があります。このような多様な古墳が造られた時期を「古墳時代」と呼び、大きく前期（3～4世紀）、中期（5世紀）、後期（6～7世紀）に分けられています。

今のところ、袖ヶ浦市内からは約500基の古墳が見つかっており、その多くは小櫃川中～下流域の南側、ここ平川地区に存在しています。そこで本展示では、中富地区に存在する古墳の中でも、近年発掘調査を行った古墳について紹介させていただきます。

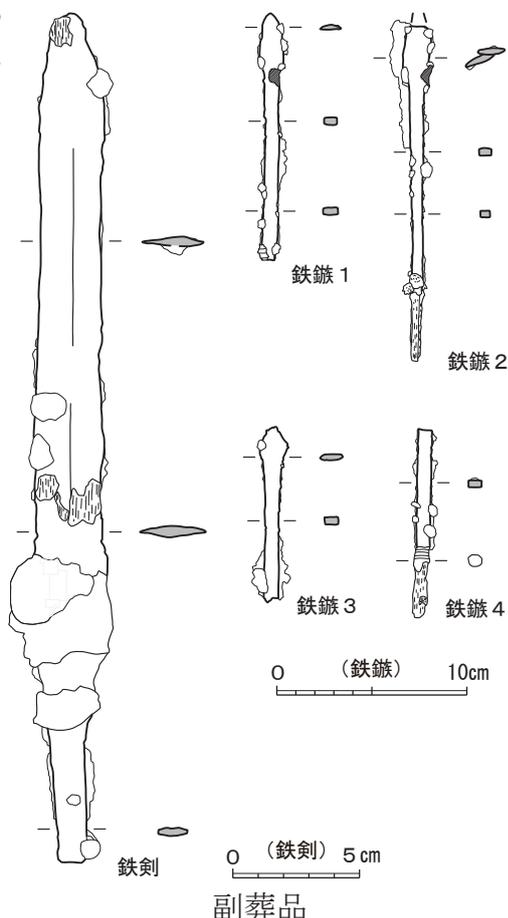
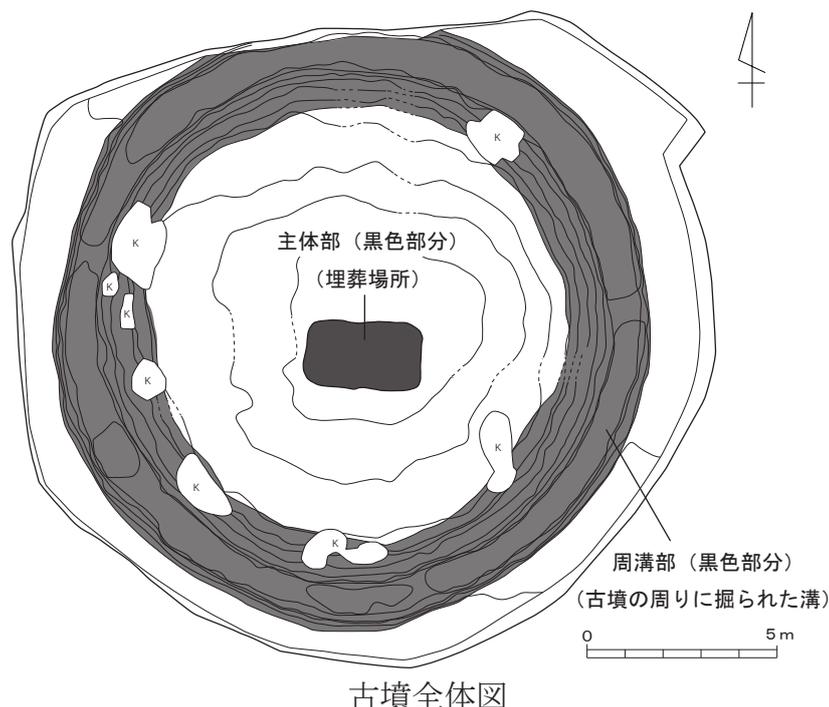
おたけ

○大竹古墳群（第117号墳）

- 市内最大規模の古墳群内に所在する中期の円墳 -

大竹古墳群は、袖ヶ浦市大竹に所在する古墳群です。この古墳群の中には、現在のところ100基前後の古墳が存在すると考えられており、市内でも、屈指の大古墳群です。

第117号墳は大竹古墳群の東端に位置する円墳で、平成28年に発掘調査を行いました。発掘調査の結果、棺を納めたと推測される場所から、鉄剣や鉄鏃（鉄製の矢じり）などの副葬品が出土しました。これらの副葬品から、古墳が造られたのは古墳時代中期後半（5世紀後半）と推測されます。また、古墳の造り方は、西日本で多くみられる技法が使われており、本古墳群の中でも、第117号墳に埋葬された人がどのような人物だったのかは今後の調査をもとに慎重に判断する必要があります。

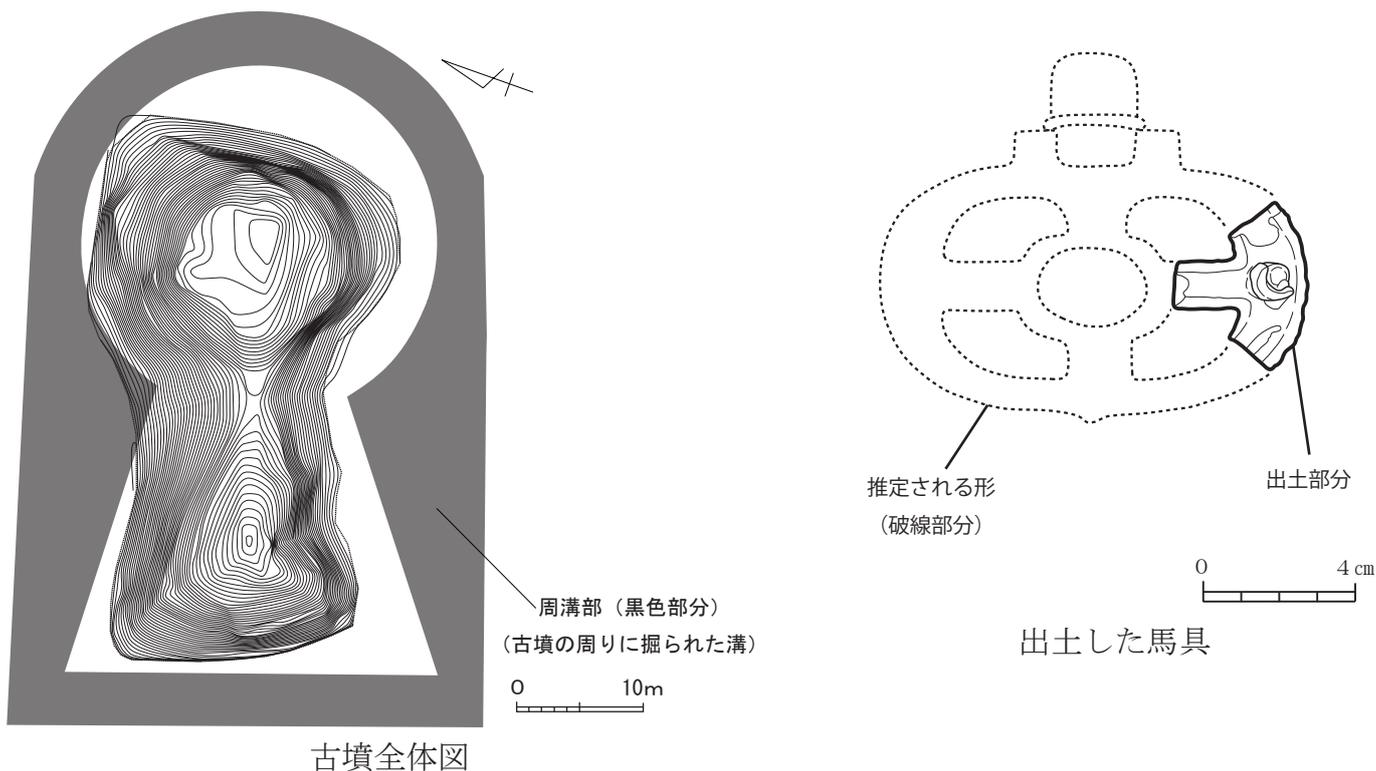


うちこしきたうえはら
○打越北上原古墳群（第3号墳）

市内初！^{こんどうそうばぐ}金銅装馬具が出土した後期の前方後円墳

打越北上原古墳群は、袖ヶ浦市打越字北上原に所在する前方後円墳2基、円墳5基が残る古墳群です。本古墳群の中でも、前方後円墳である第3号墳は、現在の形が前方後円墳の名前の由来である鍵穴状でよく残っていることから、市の文化財に指定されています。

第3号墳は、古くは戦後に進駐軍将校らによって調査されたことがわかっており、横穴式石室（石で作られた部屋の中に被葬者を納めた埋葬方法）の古墳であったことがわかっています。平成28年、29年に実施した発掘調査の結果、5m以上の大型の周溝（古墳の周囲に掘られた溝）を有することがわかり、その形は「盾形」と呼ばれる形であった可能性があります。また、第3号墳からは金銅装（金銅で装飾されたもの）の馬具（馬の装飾品）が出土しました。出土した馬具は、馬の口横に装着される鏡板という種類の馬具で、形状から十字透心葉形鏡板じゅうじすかしんようけいかがみいたという種類のものです。鉄製の馬具は市内でも出土例がありますが、金銅装の馬具は市内で初めての出土です。古墳の形や周溝の大きさ、出土品から、造られたのは古墳時代後期（6世紀）と思われ、古墳の埋葬者は小櫃川中流域に多数造られた古墳の中でも有力者であったことが推測されます。



○最後に

文化の秋です。平川公民館・富岡分館周辺には今回ご紹介した古墳や、中世の村の様子を色濃く残す横田郷遺跡をはじめ、数多くの遺跡が残っています。古代の人々に思いを寄せて、公民館周辺を散策してみてもはいかがでしょうか。